



面子維持に関する日中比較 : 質問紙調査を基に

林, 萍萍

(Citation)

国際文化学, 35:282-303

(Issue Date)

2022-03-18

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013118>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013118>



面子維持に関する日中比較¹⁾

—質問紙調査を基に—

A Cross-Cultural Comparison of Face-Maintenance

Between Japanese and Chinese

—Based on questionnaire surveys—

林萍萍

LIN Pingping

Summary

The purpose of this study was to develop a face-maintenance scale that reflects both Japanese and Chinese cultural elements and compare face-maintenance consciousness between Japan and China. In Study 1, to develop a scale applicable for Chinese and Japanese, 118 Japanese and 133 Chinese university students were asked to evaluate existing items related to maintaining face and to write about how they maintain their own face and the face of others in their daily life. In Study 2, 192 Japanese and 285 Chinese were asked to rate the 32-item face maintenance scale developed in Study 1, to examine the reliability and validity of the scale, and to examine the relationship between face-maintenance consciousness and cultural self-construal. In Study 3, we examined the relationship between face-maintenance consciousness, cultural self-construal, and need for approval among 129 Japanese and 155 Chinese working adults. Results indicated that (1) Chinese people tend to be more conscious of maintaining their own face and others' face than Japanese people. (2) In both Japan and China, "interdependent construal of self was positively correlated with "other-face maintenance"; "self-face maintenance" and "other-face maintenance" were positively correlated with the desire to avoid rejection. (3) In Japan, there was a positive correlation between "self-face maintenance" and "desire to win praise", but this relationship was not found in China. These results suggest that the 32-items face-maintenance scale developed in this study is generally reliable and valid for Chinese and Japanese.

キーワード

面子維持、文化的自己観、承認欲求、日中比較、質問紙調査

はじめに

いずれの文化においても、個人は良い自己を維持しようとするが、その方略は文化によって異なると指摘されている(Heine, 2003)。Heine(2003)によれば、肯定的な自己観を維持するには、自尊心を維持することと面子を維持することの 2 通りの方略がある。自尊心文化では、自己高揚を通して自尊心を高く維持することが重要であるのに対して、面子文化では、自己改善を通して、面子を失わないことが重要である。また、個人主義文化は自尊心を重視するのに対して、集団主義文化は面子を重視すると論じられている(Heine, 2005, 2007)。ここで取り上げられている面子は、自尊心と似ている概念であるが、両者の間には共通点がある一方、相違点もある。まず、両者の共通点としては、いずれも個人が肯定的な自己価値を求めるように動機づけられているというところである(Heine, 2003, 2004, 2005)。相違点については、自尊心は、自分に対する肯定あるいは否定的な態度である(Rosenberg, 1965)と定義されているのに対して、面子は、自己評価ではなく、他者の評価や承認に依存している(劉, 2011)。

一方、面子の定義については、多くの研究者が言語学、社会学、心理学などのアプローチを用いて面子を分析してきたが、いまだに研究成果は統一されていないと指摘されている(趙, 2013)。林(2017)では、面子の概念に関する主な先行研究をレビューし、整理した上で、15 の面子概念は、道徳的面子と社会的面子、社会学的視点と心理学的視点、他者焦点と自己焦点、の 3 つの観点から分類できることを示している。そのうち、心理学的視点においては、面子は他者に見せる公的・自己イメージとされている(例えば、陳, 1988; Lim, 1994; 末田, 1998)。

上述したように、自尊心は自分から得るものであるのに対して、面子は他者から得るものである。自尊心と比べ、面子は失われやすく、いったん失ったら回復することは難しい。面子文化が優勢である東アジア文化圏では、日常生活において、自分の面子をいかに維持するかは、人々の最大な関心事である。また、中国や日本のような集団主義文化の国では、アメリカのような個人主義文化の国とは異なり、自分の面子だけでなく他者の面子を維持することも重視されると指摘されている(Oetzel & Ting-Toomey, 2003)。

また、面子は、日中社会における重要な行動原理の一つと指摘されているように(穴田, 1985; Lin, 1936)、面子維持意識は日本人と中国人の日常生活におけるさまざまな行動に影響を与えていると考えられる。日本人と中国人との円滑なコミュニケーションを図るには、双方が自分と他者の面子をどのように維持するのかを互いに正しく理解することが非常に重要であると考えられる。

これまでの文化比較研究の多くは、個人主義文化と集団主義文化という枠組の中で、面子維持を検討してきたが、各文化圏内での差異が見過ごされている。東アジア文化圏においては、面子維持意識がどのように異なるのだろうか。本研究では、日本人と中国人の面子維持意識に着目し、日本人と中国人がどのように、自分と他者の面子を維持するのかを調べ、面子維持意識と関連する心理的概念との関係を比較検討する。

面子維持意識に関する文化比較研究

これまでの研究は、「自分の面子」と「他者の面子」の 2 次元で面子維持意識（以下、「自己面子維持」と「他者面子維持」とする）を検討しているものが多い。面子維持意識に関する文化比較研究では、文化が自己面子維持と他者面子維持の両方に影響を与えると報告されている一方、一貫した結果が得られていない。以下には、日本と中国の結果に着目しながら、主な先行研究を概観する。

Ting-Toomey et al.(1991)は、日本人、中国人、韓国人、台湾人、アメリカ人を対象に質問紙調査を行ったところ、自己面子維持について、日本人は最も自己面子意識が高く、中国人はアメリカ人に次いで 3 番目に高いこと、他者面子維持について、中国人が最も高いのに対し日本人は最も低いことを報告している。

Gao(1998)は、中国人は全般的に強い面子意識をもっていることを指摘している。また、Gao & Ting-Toomey(1998)は、日本人は強い他者面子維持意識と相互面子維持意識（互いの面子）をもっているが、必ずしも強い自己面子維持意識をもっているというわけではないと指摘している。

Oetzel et al.(2001)は、中国人、ドイツ人、日本人、アメリカ人を対象に 3 つの面子意識 (self-face, other-face, mutual face) について、質問紙調査を行ったところ、集団主義文化 (中国人と日本人) は個人主義文化 (ドイツ人とアメリカ人) と比べ、強い他者面子意識をもっており、個人主義文化は集団主義文化と比べ、強い自己面子意識をもっている傾向があることがわかった。また、相互面子意識において、有意な文化差が認められないこと、中国人は日本人とアメリカ人より強い自己面子意識をもっていることがわかった。

Kim et al.(2007)は、中国人、日本人、韓国人を対象に質問紙調査を行ったところ、中国人は日本人と韓国人よりも強い自己面子維持意識をもっていることを報告している。

このように、中国人と日本人の自己面子維持意識と他者面子維持意識を比較した先行研究の結論は一貫していない。Ting-Toomey et al.(1991) は、日本人がアメリカ人より自己面子維持の意識が強い結果を得ているが、Morisaki & Gudykunst(1994)が、このような結果を得られたのは、使用された尺度に問題があるからではないかと論じている。すなわち、使用された尺度は日本人の面子の相互協調的側面が正しく反映されないものだとしている。

これまでの文化比較研究の多くは、個人主義文化と集団主義文化を区別し、個々の研究目的にそって各研究者が独自に開発した尺度を用いてなされている。これらの研究は、個人主義文化と集団主義文化の差を強調し、同じ文化圏に属している中国と日本の間にみられた文化差をあまり問題視してこなかった。

これまでの面子維持意識に関する研究の問題点として、使われた尺度が統一されておらず、研究方法が、シナリオ法か、回想法か、それともそれらを使わず直接面子意識を評定させるものかのいずれかで、それぞれ異なっていることが挙げられる。また、Morisaki & Gudykunst(1994)が指摘しているように、多文化比較のために使われた尺度は日本人と中国人の両方の面子意識を反映しているとは言えない。さらに、Ting-Toomey et al.(1991)では、大学生を対象としたのに対して、Kim et al.(2007)では、大企業で働いている社会人を対象とした。矛盾した日中文化差が得られたのは、調査対象者の違いにも関わっているのではないかと考えられる。

面子維持の尺度に関する研究

上述したように、これまでの面子維持意識に関する文化比較研究では、異なる尺度が使用されてきた。ここでは、既存の面子維持意識に関する尺度について概観する。

Zane & Yeh(2002)は、面子喪失に関する行為の45項目に対して5人の心理学専門家に評定してもらい、最終的に21項目を選出して尺度を作成した。この21項目の面子尺度について、158人大学生(白人アメリカ人77人、アジア系アメリカ人81人)に評定させたところ、1因子が抽出された。Mak et al.(2009)は、中国人362人(大陸人192人、香港人170人)を対象に、Zane & Yeh(2002)が開発した面子維持尺度に評定させたところ、「自己面子維持」(10項目)と「他者面子維持」(8項目)という2つの因子が抽出された。

Ting-Toomey & Oetzel(2001)は、自己面子、他者面子、相互面子の3つの次元から面子維持行為尺度を開発した。この尺度には、自己面子維持に関する項目は7項目、他者面子維持に関する項目は11項目、両方の面子維持に関する項目は4項目ある。

毛・大坊(2006b)は中国人大学生604人を対象に96項目質問紙調査を行い、そこから41項目を選び出して中国人大学生社会的スキル尺度を開発した。その尺度では、中国人大学生の社会的スキルの内容は4つの因子(「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」)からなっており、19項目からなる第1因子は相手の面子を気にすることに関する因子(「相手の面子」)である。

上記の3つの尺度の特徴を以下に述べる。Zane & Yeh(2002)の尺度は、面子維持に関する具体的な行為であり、例えば、「ディスカッションする時に、自分の無知を暴くかもしれないので、質問しないようにする」、「相手が当惑するだろうから、相手を責めない」といった自分と他者の面子を維持する具体的な行為に関する項目が含まれる。Ting-Toomey & Oetzel(2001)の尺度は、具体的な行為ではなく、「自分のイメージを維持しよう心がける」、「相手のプライドを維持しよう協力する」といった意識や態度に関する項目からなる。毛・大坊(2006b)の尺度は具体的な行為と意識に関する項目が含まれている。

面子維持意識と関連概念

面子維持意識の関連概念として、文化的自己観がもっとも多く取り上げられる。これまでの研究では、文化的自己観と面子維持意識の関係が多く検討されており、「自分を他の人々から切り離された存在と捉える」という相互独立的自己(Markus & Kitayama, 1991)が自己面子維持意識と正の相関があり、「自分を本質的に周りの人々から離せない存在と捉える」という相互協調的自己(Markus & Kitayama, 1991)が他者面子維持意識、相互面子維持の意識と正の相関があることが報告されている(Oetzel et al., 2001; Ting-Toomey & Oetzel, 2001; Oetzel & Ting-Toomey, 2003)。

また、面子は、自己評価ではなく、他者の評価や承認に依存している(劉, 2011)と指摘されていることから、承認欲求が高いほど、面子維持意識も高いと推測される。承認欲求には、他者から肯定的な評価を獲得しようとする「賞賛獲得欲求」と、他者の否定的評価を回避しようとする「拒否回避欲求」の2側面がある(菅原, 2004)。小島・太田・菅原(2003)は、この2つの側面を測定する「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求」という心理尺度を作成している。「賞賛獲得欲求」には「人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい」

や「大勢の人が集まる場では、自分を目立たせようとはりきる方だ」などの項目が含まれている。「拒否回避欲求」には「意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる」や「不愉快な表情をされると、あわてて相手の機嫌をとる方だ」などの項目が含まれている。

面子維持意識のそれぞれの側面は、承認欲求のそれぞれの側面とどのような関連があるのだろうか。相互協調的文化観が優勢である日本と中国においては、他者の面子を維持しない場合（例えば公的場面で相手の面子を潰すなどの行為）は、相手から否定的な評価を得ることになるだろう。このように、他者の面子を維持することで、他者からの否定的評価を避けることができると推測されるが、他者から肯定的な評価を得ることに繋がるのだろうか。この点については、まだ明らかにされていない。

日本人と中国人の自己面子維持と他者面子維持を検討するために、まず既存尺度の項目を吟味した上で、日本文化的要素と中国文化的要素が反映される項目を追加して検討する必要があると考えられる。また、本研究で作成しようとする面子維持尺度の妥当性を検討するために、面子維持と関連している承認欲求および文化的自己観の尺度を用いる。

本研究は、「自己面子維持」と「他者面子維持」の 2 つの次元から面子維持意識を検討し、3 つの研究を通して日中比較を行う。具体的には次の 3 つのことを検討する。研究 1 では、先行研究で使われた尺度の項目を吟味し、日本文化的要素と中国文化的要素が反映される面子維持意識の尺度を作成する。研究 2 では、日本人と中国人の大学生を対象に、面子意識がどのように異なるのかを検討する。研究 3 では、日本人と中国人の社会人を対象に、面子維持意識と文化的自己観および承認欲求との関連について検討する。

研究 1

日中大学生を対象に、自己面子維持と他者面子維持について予備調査を行い、既存の尺度の項目を吟味した上で、面子維持意識に関する尺度を作成する。

方法

調査協力者 日本人は関西のある大学の大学生 118 人(男性 79 人、女性 39 人、平均 19.3 歳、標準偏差 0.80)であった。中国人は大学生 133 人(男性 45 人、女性 88 人、平均 21.8 歳、標準偏差 3.90)であった。

質問紙 Zane & Yeh(2002)が作成した面子維持尺度 20 項目、Ting-Toomey & Oetzel(2001)が作成した 15 項目(自己面子維持)に関する 7 項目と「他者面子維持」に関する 8 項目、毛・大坊(2006b)が作成した中国人の社会的スキル尺度の「相手の面子」因子にあたる 18 項目を合わせて、計 53 項目に対して、「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」5 件法で回答を求めた。また、日頃どのように自分の面子および相手の面子を維持するかについて自由記述してもらった。

手続き 英語の尺度(Zane & Yeh, 2002; Ting-Toomey & Oetzel, 2001)の翻訳は、筆者が英語から日本語と中国語の翻訳を担当し、日本語から英語へ、中国語から英語への訳し戻しは、英語に堪能な日本人 1 名(修士課程の大学院生)、英語に堪能な中国人 1 名(博士課程の大学院生)に翻訳を依頼した。なお、バックトランスレーションが適切かどうかについて、日本人心理学者と中国人心理学者が確認した。日本語の尺度の翻訳も同じ手続きで行った。

回答方法は、Google Form で作成したアンケートのリンク先を授業で配布し、授業時間外に回答してもらった。中国人のアンケートは「問巻星」というウェブサイト上で作成し、同じ方法で回答を求めた。調査の冒頭で、回答の任意性や個人情報の保護など倫理的配慮について明記した上で、参加に同意したもののみに質問項目を提示することになっている。調査時期は 2017 年 2 月であった。

結果・考察

本研究の統計分析には HAD ver.17.202(清水, 2016)を使用した。因子分析に先だって、KMO(Kaiser-Meyer-Olkin)の標本妥当性の測度と Bartlett の球面性検定により検証したところ、KMO 値は 0.7 以上で、Bartlett の球面性検定の有意確率は $p < 0.01$ であった。先行研究と同じような因子構造が得られるかを検討するために、日本人と中国人のデータをまとめて探索的因子分析(プロマックス回転、最尤法)を行った。固有値の減退ならびにスクリープロットにより 2 因子が抽出された。第 1 因子は「他者面子維持」であり、第 2 因子は「自己面子維持」であることがわかった。2 因子による累積寄与率は 49.69%、内的整合性による信頼性係数(α)は第 1 因子で $\alpha = .93$ 、第 2 因子で $\alpha = .90$ であった。Ting-Toomey & Oetzel(2001)、毛・大坊(2006b)が開発した尺度の項目については、全ての項目は先行研究と同じ因子配置となっている。一方、Zane & Yeh(2002)が開発した尺度の項目については、いくつかの項目は先行研究と異なる因子配置となっている(付録 1)。

面子維持に関する自由記述については、自己面子維持に関する行為について、日本人からのべ 106、中国人からのべ 112 の回答が得られ、他者面子維持に関する行為について、日本人からのべ 111(表 1)、中国人からのべ 127 の回答から得られた(表 2)。長い文を分解してから、これらの回答について、KJ 法(川喜田・牧島, 1970)により分析を行った。

表 1 日本人の面子維持行為の自由記述

自己面子維持行為	記述数	他者面子維持行為	記述数
発言・失言しないようにする	14	相手をほめる	20
言い訳をする	11	相手の意見を否定しない	14
笑ってごまかす	11	相手の短所に触れない	12
慎重に行動する	7	言動に気を付ける	16
その場を離れる	5	相手を配慮する	8
目立たないようにする	5	相手を立てる	7
弱みを見せない	6	相手を尊重する	6
謙虚な態度をとる	4	相手を責めない	4
素直でいる	4	相手の失敗を指摘しない	4
ミスを訂正する	3	相手をフォローする	4
冷静でいる	3	話題を変える	4
自信を持つ	3	その他	12
その他	30		
合計	106	合計	111

KJ 法については、筆者が全ての回答について、意味が同じまたは近いものどうしをグルーピングした。信頼性を確かめるため、別の日本語母語話者 1 名に回答とカテゴリーを呈

示し、それぞれの回答はどのカテゴリーに当てはまるかを評定してもらったところ、分類の一致率は 92.1%であった。中国人のデータは、同じ方法で日本の大学に在学する中国人大学院生 1 名に分類してもらった。分類の一致率は 93.9%であった。分類が不一致であった回答について、話し合いにより最終的な分類を決定した。

自己面子維持行為については、日中間で多くの類似するカテゴリーが得られた。日中とも「言い訳をする」、「慎重に行動する」を多く挙げている。一方、日本人は中国人の回答にない「笑ってごまかす」を多く挙げ、中国人は日本人の回答にはない「自嘲する」、「不言実行」を挙げている。

他者面子維持行為については、日中とも「相手をほめる」、「相手の短所やミスに触れない」を多く挙げている。日本人は中国人の回答にはない「相手の意見を否定しない」を多く挙げ、中国人は日本人の回答にはない「相手に引っ込みがつくようにする」「プライベートで相手に意見を指摘する」「相手を窮地から助ける」「その場を取り繕うようにする」を多く挙げている。また、中国人は自己面子維持行為としても他者面子維持行為としても、「ユーモアを使う」を挙げているところは特徴的であると考えられる。

表 2 中国人の面子維持行為の自由記述

自己面子維持行為	記述数	他者面子維持行為	記述数
自嘲する	13	相手に引っ込みがつくようにする	13
言い訳をする	12	相手をほめる	12
慎重に発言・行動する	10	プライベートで相手に意見を指摘する	10
不言実行	8	相手を尊重する	10
話題を変える	8	相手のミスを指摘しない	10
反論・弁解する	8	相手を窮地から助ける	10
発言しないようにする	7	その場を取り繕うようにする	8
その場を離れる	5	話題を変える	7
謙虚な態度をとる	4	ジョークを言う	6
良い行動をとる	4	相手の気持ちを考える	6
ユーモアを使う	4	自分の非を認める	5
欠点を隠す	3	共感する(自分の同じような経験を語る)	4
理性でいる	3	その他	26
自己向上する	3		
事前に準備する	3		
その他	17		
合計	112	合計	127

日本人と中国人のデータを合わせて行った因子分析および、日本人と中国人が別々に行った因子分析の結果を踏まえて、日中ともに因子負荷量が高いもの、具体的な行為と意識に関する項目のバランスを考慮した上で、23 項目(自己面子維持に関する 11 項目; 他者面子維持に関する 12 項目)を選び出した。

また、自由記述の結果を参考にして、「自分の欠点や失敗を自分であざけり笑うことでごまかそうとすることがよくある」、「不平不満などを言わず黙々とすべきことを行う(不言実行)」、「失敗した時に、相手からの非難や自分のイメージの悪化を防ぐため、つい言い訳を口にする」、「都合の悪いことを言われたときに、笑ってごまかす」「自信のない話題につい

て、できるだけ発言しないようにする」という自己面子維持に関する 5 項目、「公的場面で相手の間違いを指摘することを避け、できるだけ、プライベートで婉曲な表現で指摘する」「相手が困っているとき、物事を丸く収めるようにその場を取り繕うように協力する」「相手が気まずい状況に置かれたとき、相手が窮地から脱出することに協力する」「相手意見を真っ向から大きく否定しない」「自信のない話題について、できるだけ発言しないようにする」という他者面子維持に関する 4 項目を加えた。これらの計 32 項目を本調査で使用することにした。

研究 2

研究 1 で作成した 32 質問項目を用いて質問紙調査を行い、日中大学生の自己面子維持意識と他者面子維持意識を比較検討する。

方法

調査協力者 日本人は関西のある大学の大学生 192 人(男 132 人、女 60 人、平均 19.7 歳、標準偏差 0.87)であった。中国人は浙江省にある 2 箇所の大学の大学生 285 人(男 125 人、女 160 人、平均 20.8 歳、標準偏差 1.13)であった。

質問紙 予備調査で作成した面子維持尺度 32 項目(「自己面子維持」に関する 16 項目、「他者面子維持」に関する 16 項目)、高田(2000)が作成した「相互独立的・相互協調的自己観尺度」20 項目を用いた。各項目に対して「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」の 5 段階で評定してもらった。

手続き 日本人はウェブサイトで回答を求めた。回答方法は、Google Form で作成したアンケートのリンク先を授業で配布し、授業時間外に回答してもらった。中国人のアンケートは筆者の知り合いの大学教員に依頼し、中国の大学で講演を行ったときに実施した。講演の途中で一斉に質問紙を配布して学生に回答を記入してもらい、講演終了後質問紙を回収した。調査時期は 2017 年 6 月~7 月であった。

結果・考察

尺度の因子構造

各尺度について、KMO の標本妥当性の測度と Bartlett の球面性検定により検証したところ、いずれも KMO 値は 0.7 以上で、Bartlett の球面性検定の有意確率は $p < 0.01$ であった。研究 1 で作成した面子維持尺度は日本人と中国人のそれぞれについて、適用しているのかを確認するために、国別に探索的因子分析(プロマックス回転、最尤法)を行った。固有値の減退ならびにスクリープロットにより、日本人では、2 因子構造が確認された。第 1 因子は「他者面子維持」、第 2 因子は「自己面子維持」であった(表 3)。内的整合性による信頼性係数(α)が第 1 因子で $\alpha = .89$ 、第 2 因子で $\alpha = .88$ であり、ともに許容される範囲であった。項目 13「バツが悪いとき、いつも相手に引っ込みがつくようにする」の因子負荷量がやや低く、項目 6「失敗した時に、相手からの非難や自分のイメージの悪化を防ぐため、つい言い訳を口にする」と項目 10「自分の欠点や失敗を、あざけり笑うことでごまかそうとすることがよくある」の因子負荷量が極めて低く、0.3 以下であった。

表 3 日本人の面子維持尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2	共通性
第1因子: 他者面子維持; $\alpha = .89$			
31.相手の意見を、真つ向から大きく否定しない。	.70	.06	.47
1.相手のプライドを維持するように心がける。	.66	-.04	.42
9.相手の面子を潰さないように心がける。	.66	-.02	.43
11.相手の短所に触れることを極力に避ける。	.61	.06	.40
19.自分の頼み事が相手にとって迷惑だと思うから、助けを求めることをためらう。	.60	.07	.40
21.あることについてコメントする前に、自分が間違っているかもしれないと言う。	.60	.02	.36
17.ある問題をディスカッションするとき、相手の人を自分が非難していないことを知らせるように努める。	.58	.06	.36
15.謙虚に振舞うことで相手の気分をよくするよう心がける。	.58	.16	.41
29.相手が気まずい状況に置かれたとき、相手が窮地から脱出することに協力する。	.56	-.02	.31
5.相手の意見や気持ちを尊重する。	.55	.06	.29
25.公的場面で相手の間違いを指摘することを避け、できるだけ、プライベートで婉曲な表現で指摘する。	.55	-.01	.30
27.相手が困っているとき、物事を丸く収めるように、その場を取り繕うように協力する。	.55	.02	.29
7.話をして相手の長所によつて触れる。	.54	.15	.27
23.他の人と自分の争いを解決するために、第三者に助けてもらうことを好む。	.52	.03	.28
3.いつも相手の立場に立って物事を考える。	.50	-.15	.23
13.バツが悪いとき、いつも相手に引っ込みがつくようにする。	.33	.07	.13
第2因子: 自己面子維持; $\alpha = .88$			
14.自分が恥をかかないよう心がける。	.11	.69	.45
12.目立たないように行動する。	.01	.69	.48
2.自信のない話題について、できるだけ発言しないようにする。	-.09	.68	.43
32.他の人の前でミスをしたくないので、控えめな態度を維持する。	.16	.65	.51
16.自分のプライドを守るよう心がける。	-.10	.65	.40
30.他の人の前で自分の弱みを見せないよう心がける。	-.01	.64	.41
18.自分が他の人の前でミスをしたとき、他の人がそれに気づかないようにする。	.04	.63	.39
24.ディスカッション中、他の人に無知と思われるだろうから、質問しないようにする。	.11	.62	.44
28.他の人が自分に非現実的なほど高い期待をもたないように、自分の能力と業績を控えめに言う。	.02	.62	.39
20.誰かが自分を批評しているとき、その人を変えるようにする。	.11	.62	.43
4.都合の悪いことを言われたときに、笑ってごまかす。	-.04	.60	.35
22.ミスを最小限にするため、発言や行動を慎重に計画する。	.07	.52	.29
26.社会的規範と一致するように、他の人と同じ行為をする。	.04	.51	.24
8.あれこれを言わず、黙々とすべきことを行う。	-.02	.49	.27
6.失敗した時に、相手からの避難や自分のイメージの悪化を防ぐため、つい言い訳を口にする。	-.01	.29	.24
10.自分の欠点や失敗を、あざけり笑うことでごまかそうとすることがよくある。	-.14	.21	.14
因子寄与	6.26	5.81	
累積寄与率	19.55%	37.70%	

一方、固有値の減退ならびにスクリープロットにより、中国人も日本人と同じく 2 因子構造が確認された(表 4)。内的整合性による信頼性係数(α)が第 1 因子で $\alpha = .88$ 、第 2 因子で $\alpha = .77$ であり、第 2 因子の信頼性係数がやや低い、ともに許容される範囲であった。

また、中国人は項目 23「他の人と自分の争いを解決するために、第三者に助けてもらうことを好む」、項目 6「失敗した時に、相手からの非難や自分のイメージの悪化を防ぐため、つい言い訳を口にする」、項目 10「自分の欠点や失敗をあざけり笑うことでごまかそうとすることがよくある」の因子負荷量が非常に低く、いずれも 0.3 以下であった。項目 6 と項目 10 は中国人の自由記述への回答が多かったが、質問項目の表現があまり適切でなかったのかもしれない。

表 4 中国人の面子維持尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2	共通性
第1因子: 他者面子維持: $\alpha = .88$			
9.相手の面子を潰さないように心がける。	.75	-.07	.54
1.相手のプライドを維持するように心がける。	.74	.00	.55
15.謙虚に振舞うことで相手の気分をよくするよう心がける。	.68	-.04	.45
5.相手の意見や気持ちを尊重する。	.67	-.05	.43
17.ある問題をディスカッションするとき、相手の人を自分が非難していないことを知らせるように努める。	.67	-.02	.44
29.相手が気まずい状況に置かれたとき、相手が窮地から脱出することに協力する。	.66	-.12	.41
25.公的場面で相手の間違いを指摘することを避け、できるだけ、プライベートで婉曲な表現で指摘する。	.64	.00	.41
11.相手の短所に触れることを極力避ける。	.61	-.02	.37
27.相手が困っているとき、物事を丸く収めるように、その場を取り繕うように協力する。	.60	-.06	.34
19.自分の頼み事が相手にとって迷惑だと思われ、助けを求めることをためらう。	.59	.06	.37
3.いつも相手の立場に立って物事を考える。	.57	.03	.33
13.バツが悪いとき、いつも相手に引っ込みがくようにする。	.55	.10	.34
31.相手の意見を、真向から大きく否定しない。	.55	.02	.30
21.あることについてコメントする前に、自分が間違っているかもしれないと言う。	.53	.07	.31
7.話をしている相手の長所によく触れる。	.42	.04	.19
23.他の人と自分の争いを解決するために、第三者に助けてもらうことを好む。	.24	.12	.09
10.自分の欠点や失敗を、あざけり笑うことでごまかそうとすることがよくある。	.20	.15	.08
第2因子: 自己面子維持: $\alpha = .77$			
32.他の人の前でミスをしたくないので、控えめな態度を維持する。	-.04	.76	.56
24.ディスカッション中、他の人に無知と思われるだろうから、質問しないようにする。	-.13	.57	.30
16.自分のプライドを守るよう心がける。	.14	.57	.30
12.目立たないように行動する。	.04	.55	.32
2.自信のない話題について、できるだけ発言しないようにする。	.06	.49	.26
26.社会的規範と一致するように、他の人と同じ行為をする。	-.02	.48	.23
14.自分が恥をかかないよう心がける。	.07	.45	.22
22.ミスを最小限にするため、発言や行動を慎重に計画する。	.12	.44	.23
30.他の人の前で自分の弱みを見せないよう心がける。	-.04	.44	.18
18.自分が他の人の前でミスをしたとき、他の人がそれに気づかないようにする。	.05	.42	.19
28.他の人が自分に非現実的なほど高い期待をもたないように、自分の能力と業績を控えめに言う。	-.08	.38	.13
8.あれこれ言わず、黙々とすべきことを行う。	.14	.36	.17
20.誰かが自分を批評しているとき、その人を避けるようにする。	-.14	.35	.12
4.都合の悪いことを言われたときに、笑ってごまかす。	.16	.31	.15
6.失敗した時に、相手からの避難や自分のイメージの悪化を防ぐため、つい言い訳を口にする。	-.02	.14	.02
因子寄与	6.28	3.59	
累積寄与率	19.64%	30.88%	

各下位尺度間の相関関係

面子維持尺度については、因子負荷量が 0.30 以下の項目 6、10、23 を除外して、それぞれの下位尺度の尺度得点の平均を求めた。文化的自己観尺度については、日中とも因子分析を行ったところ、これまでの先行研究と同じく 2 因子が確認され、いずれの信頼性係数(α)も 0.80 以上であったので、下位尺度の尺度得点の平均を求めた。各尺度の記述統計量及び相関係数を表 5 に示す。面子維持行為尺度の下位尺度間の相関がやや高かったため、偏相関係数もあわせて算出した。偏相関係数については、日中とも、「自己面子維持」と「他者面子維持」の間に有意な正の相関がみられた(日本: $r=.29$, $p<.01$; 中国: $r=.41$, $p<.01$)。また、日中とも、「自己面子維持」と「相互協調的自己」(日本: $r=.33$, $p<.01$; 中国: $r=.25$, $p<.01$)、「他者面子維持」と「相互協調的自己」(日本: $r=.33$, $p<.01$; 中国: $r=.19$, $p<.01$)との間に有意な正の相関がみられた。

各因子における下位尺度の平均値を日中比較したところ、文化的自己観の両因子においては有意な文化差がみられなかった。また、「自己面子維持」($t(475)=6.57$, $p<.001$)と「他

者面子維持」の得点($d(475)=11.17, p<.05$)は日本人より中国人のほうが高かった。

表 5 各尺度の記述統計量と相関係数及び偏相関係数

変数	自己面子維持	他者面子維持	相互独立的自己	相互協調的自己	M	SD
日本人(n=192)						
自己面子維持	—	.29 **	-.13	.33 **	3.37	0.64
他者面子維持	.43 **	—	.15 +	.33 **	3.47	0.61
相互独立的自己	-.17 *	.02	—	-.15 +	3.20	0.69
相互協調的自己	.48 **	.46 **	-.18 *	—	3.72	0.67
中国人(n=285)						
自己面子維持	—	.41 **	.01	.25 **	3.69	0.51
他者面子維持	.46 **	—	.01	.19 *	3.98	0.51
相互独立的自己	-.02	-.01	—	-.09	3.34	0.66
相互協調的自己	.33 **	.25 **	-.09	—	3.80	0.59

※日本人、中国人とも、数値の行列において左下は単相関変数であり、右上(黒字の数字)は偏相関係数である。** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

文化的自己観尺度については、日中大学生とも、「相互独立的自己」の得点は 3.30 前後であり、「相互協調的自己」の得点は 3.70 前後であった。日中大学生とも相互協調的自己観の方がより優勢であることが示唆された。

また、2 つの文化的自己観の間には有意な文化差がみられなかった。文化的自己観を扱った先行研究では、2 つの文化的自己観に関する日中文化差は一貫していない。高田(1996)と富田(2014)の調査では相互協調的自己観については日中文化差がみられず、中国人が日本人より高い相互独立的自己観を持っていると報告している。一方、許・田中(2004)の調査では、日本人は中国人より高い相互協調的自己観を持っており、中国人は日本人より高い相互独立的自己観を持っていることが示唆された。

さらに、「自己面子維持」と「他者面子維持」の間に有意な相関がみられた。この結果は、日中とも自分の面子を維持しようとする人ほど他者の面子も維持しようとすることを示唆していると考えられる。

Mak et al.(2009)は、中国人を対象に、Zane & Yeh(2000) の 21 項目から構成される面子行為尺度を用いた調査を行ったところ、「自己面子維持」因子と「他者面子維持」因子の間に弱い相関($r=.27$)がみられたと報告している。Oetzel & Ting-Toomey(2003)が 4 か国(米独日中)の大学生を対象に自分の研究チームで開発した面子尺度を用いて質問紙調査を行ったところ、両因子の間に弱い相関しかみられなかった($r=.11$)。Zhang et al.(2014) は、Oetzel & Ting-Toomey(2003)の尺度(Ting-Toomey & Oetzel(2001)の尺度の短縮版)を用いてアメリカ人と中国人の大学生を対象に質問紙調査を行ったところ、中国人は両因子の間に有意な正の相関($r=.31$)がみられたのに対して、アメリカ人はこのような関係がみられなかったと報告している。

これまでの先行研究で使用された面子尺度の項目は完全に同じものではないが、中国人を研究対象とした研究では「自己面子維持」と「他者面子維持」の間には弱い相関があることが報告されている。このように、「自己面子維持」と「他者面子維持」の間に関連があることは集団主義文化の特徴であるかもしれない。

Oetzel と Ting-Toomey のチームの一連の研究で報告されている、「自己面子維持」と「相互独立的自己」の間、「他者面子維持」と「相互協調的自己」の間に正の相関があるという面子維持行為と文化的自己観との関係については、前者の関係は本研究で確認されず、後者の「他者面子維持」と「相互協調的自己」との関係が確認された。また、本研究では「相互協調的自己」と「自己面子維持」の間に有意な相関が得られたが、これまでの先行研究ではそうした関係は報告されていない。

研究 2 の結果から、日中とも相互協調的自己観が高い人ほど、自分の面子と他者の面子を維持する意識が強いこと、中国人は日本人よりも、強い自己面子維持意識と他者面子維持意識をもっていることが示唆された。

研究 3

研究 2 では、日中大学生のみを調査対象とし、面子維持意識を比較した。こうした限定された対象者から得られた結果を一般化することは困難であろう。研究 2 で得られた結果は、日中の社会人にも該当するのだろうか。また、研究 2 では、面子維持意識と文化的自己観の関係を検討するために、日本人研究者が開発した文化的自己観の尺度(高田, 2000)を用いたが、これまでの先行研究では、Singelis(1994)の尺度を用いたものが多い。研究 3 では、日中の社会人を対象に、自己面子意識と他者面子意識を比較する。研究 2 と異なると、研究 3 では、Singelis(1994)の文化的自己観の尺度を用いる。また、承認欲求の尺度を加えて検討する。

方法

調査協力者 20 代～50 代の日本人 128 人(男性 61 人、女性 66 人、不明 1 名、平均年齢 32.8 歳、標準偏差 9.55)と中国人 155 人(男性 91 人、女性 64 人、平均年齢 32.2 歳、標準偏差 5.76)であった。

質問紙 研究 2 で使用した面子維持尺度 32 項目、文化的自己観尺度 12 項目(Singelis, 1994)、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 18 項目(小島・太田・菅原, 2003)を用いた。文化的自己観尺度は 7 件法、その以外の尺度は 5 件法で評定させた。

手続き 日本人では、Google Form で作成したアンケートのリンク先を回答者に送付し、回答してもらった。中国人では「問巻星」というウェブサイト上で作成し、同じ方法で回答を求めた。調査時期は 2020 年 2 月～3 月であった。

結果・考察

尺度の因子構造

各尺度について、KMO の標本妥当性の測度と Bartlett の球面性検定により検証したところ、いずれも KMO 値は 0.7 以上で、Bartlett の球面性検定の有意確率は $p < 0.01$ であった。研究 2 においても使用した面子維持尺度と自己観尺度について、日中とも因子分析(プロマックス回転、最尤法)を行ったところ、これまでの先行研究と同じく 2 因子が確認され、信頼性係数(α)も 0.80 以上であったので、研究 2 と同様、下位尺度の平均値を求めることにした。

承認欲求尺度は、日本人と中国人のデータをまとめて因子分析したところ、小島他(2003)と同じ2因子構造が確認され、第1因子は「賞賛獲得欲求」であり、第2因子は「拒否回避欲求」であった。内的整合性による信頼性係数(α)は、第1因子が $\alpha=.86$ 、第2因子が $\alpha=.77$ であった。また、日本と中国を分けて因子分析を行ったところ、日中とも同様な因子構造が得られた。

文化的自己観尺度についても上記と同じ手続きで因子分析を行ったところ、先行研究と同じ2因子構造が確認され、第1因子は「相互協調的自己」であり、第2因子は「相互独立的自己」であった。内的整合性による信頼性係数(α)は、第1因子が $\alpha=.78$ 、第2因子が $\alpha=.59$ であった。「相互独立的自己」因子の α が低いものの、いずれの項目の因子負荷量は.30以上であることで、因子構造とおり下位尺度の平均値をもとめた。

各下位尺度間の相関関係

各尺度の記述統計量及び相関係数を表6に示す。各尺度の下位尺度間の相関がみられたため、偏相関係数もあわせて算出した。

表6 各尺度の記述統計量と相関係数及び偏相関係数

	自己面子維持	他者面子維持	相互独立的自己	相互協調的自己	賞賛獲得欲求	拒否回避欲求	M	SD
日本人(n=128)								
自己面子維持	—	.06	-.03	-.15	-.45 **	.52 **	3.56	0.85
他者面子維持	.05	—	.05	.55 **	.04	.20 *	3.70	0.68
相互独立的自己	-.22 *	.05	—	.01	.23 **	-.21 *	4.17	1.02
相互協調的自己	-.11	.63 **	.08	—	.12	.11	4.65	0.80
賞賛獲得欲求	-.31 **	.31 **	.22 *	.37 **	—	.46 **	2.64	0.75
拒否回避欲求	.38 **	.41 **	-.16 +	.32 **	.34 **	—	3.63	0.74
中国人(n=155)								
自己面子維持	—	.64 **	.23 **	.05	-.16 +	.18 *	4.10	0.72
他者面子維持	.75 **	—	-.01	.29 **	-.10	.18 *	4.20	0.65
相互独立的自己	.33 **	.26 **	—	.13	.15 +	-.14 *	5.13	1.04
相互協調的自己	.37 **	.46 **	.29 **	—	.40 **	-.08	4.98	0.81
賞賛獲得欲求	.03	.09	.18 *	.41 **	—	.40 **	3.47	0.71
拒否回避欲求	.36 **	.39 **	.06	.24 **	.38 **	—	3.73	0.65

※日本人、中国人とも、数値の行列において左下は単相関変数であり、右上(黒字の数字)は偏相関係数である。** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

まず、面子維持意識と文化的自己観の関連については、日中とも、「他者面子維持」と「相互協調的自己」の間には相関がみられた(日本: $r=.55$, $p < .01$; 中国: $r=.29$, $p < .01$)。一方、中国では、「自己面子維持」と「他者面子維持」の間にはやや強い相関($r=.64$, $p < .01$)、「自己面子維持」と「相互独立的自己」の間には弱い相関($r=.23$, $p < .01$)がみられたのに対して、日本では、このような関係がみられなかった。

また、面子維持意識と承認欲求の関連については、日中とも、「自己面子維持」と「拒否回避欲求」の間(日本: $r=.52$, $p < .01$; 中国: $r=.18$, $p < .05$)、「他者面子維持」と「拒否回避欲求」の間には、正の相関がみられた(日本: $r=.20$, $p < .05$; 中国: $r=.18$, $p < .05$)。一方、日本では、「自己面子維持」と「賞賛獲得欲求」の間には、負の相関がみられた($r=-.45$, $p < .01$)のに対して、中国では、両者の間には有意な相関がみられなかった。

さらに、文化的自己観と承認欲求の関連については、日本では、「相互独立的自己」と「賞

「賞賛獲得欲求」の間には正の相関($r=.23, p<.01$)、「相互独立的自己」と「拒否回避欲求」の間には負の相関がみられた($r=-.21, p<.05$)。一方、中国では、「相互協調的自己」と「賞賛獲得欲求」の間には正の相関がみられた($r=.40, p<.01$)。

各因子における各尺度の平均値を日中比較したところ、面子維持意識については、「自己面子維持」($M(281)=5.83, p<.001$)と「他者面子維持」の得点($M(281)=6.30, p<.001$)のいずれも、日本人より中国人のほうが高かった。文化的自己観については、「相互協調的自己」においては有意な文化差がみられなかったのに対して、「相互独立的自己」の得点において日本人より中国人のほうが高かった($M(281)=9.96, p<.001$)。承認欲求については、「拒否回避欲求」においては有意な文化差がみられなかったのに対して、「賞賛獲得欲求」の得点においては日本人より中国人のほうが高かった($M(281)=9.57, p<.001$)。

研究 2 と研究 3 では、面子維持意識については、同じような結果が得られ、大学生と社会人のいずれにおいても、日本人と比べ、中国人のほうが、より強い自己面子維持意識と他者面子維持意識をもっていることが示唆された。

文化的自己観については、大学生を対象とした研究 2 では、有意な日中文化差がみられなかったが、社会人を対象とした研究 3 では、相互協調的自己においては、日本と中国の間には違いがみられなかったが、中国人は日本人と比べ、より強い相互独立的自己をもっていることが示唆された。この結果は、高田(1996)と富田(2014)の結果と一致している。

面子維持意識と文化的自己観の関連については、研究 2 と研究 3 の結果から、日中の大学生と社会人の両方とも、相互協調的自己が高いほど、他者面子維持意識が強いことが示唆された。面子維持意識と承認欲求の関連については、拒否回避欲求が高いほど、自己面子維持意識と他者面子維持意識が強いことが示唆された。

総合考察

研究 1 では、面子維持行為の尺度を作成するために、日中大学生を対象に既存の関連尺度に評定してもらうとともに面子維持行為について自由記述してもらい、その結果を踏まえて、32 項目の面子維持行為尺度を作成した。研究 2 では、研究 1 で作成した面子維持尺度、文化的自己観の尺度(高田, 2000)を日中大学生に評定してもらい、研究 3 では、面子維持尺度、文化的自己観の尺度(Singelis, 1994)、承認欲求尺度を日中社会人に評定してもらった。

研究 2 と研究 3 の結果から、中国人は日本人よりも強い自己面子維持意識と他者面子維持意識をもっていること、日本人の社会人を除いて、自己面子維持と他者面子維持の間には、正の相関があることが示唆された。また、相互協調的自己観が高いほど他者面子維持意識も強いこと、拒否回避欲求が高いほど、自己面子維持意識と他者面子維持意識が強いことが示唆された。

自己面子維持の意識と他者面子維持の意識の関係について

自己面子維持の意識と他者面子維持の意識の間にみられた正の相関については、次のように考察する。日本と中国の社会において、他者の面子を維持する行為は他者配慮、思い

やりの行為であり、他者から高く評価されるだろう。他者の面子を維持することで他者から高い評価を得ることは、結果として自分の面子を維持することになるのだろう。

また、これは面子の互惠性からも説明できると考える。面子の互惠性は多くの研究者により指摘されている(Ho, 1974; 朱, 1988; Ting-Toomey, 1988)。Ho(1974)によれば、個人は最低限の面子を維持するために相互作用の相手にある程度尊重と従順を求める必要がある。一方、個人は相手がある程度尊重し従順にならねばならない。このようにして面子を互いに維持し合う必要があるという。朱(1988)は、他者の面子を維持することは自分面子維持のスキルの1つであり、相手の面子を維持することで自分も相手からの支持を得る可能性が高くなると論じている。Ting-Toomey(1988)が提唱する面子交渉理論ではどの文化の人々も面子を獲得するために相互作用の相手と交渉するとされるが、これは面子の互惠性を前提としたものであると考えられる。

このように、面子の互惠性から考えれば、自分が相手の面子を維持してあげれば、同じように相手も自分の面子を維持してくれると期待できる。その結果、最終的に自分の面子を維持することにつながると考えられる。

日本人の社会人において、自己面子維持と他者面子維持の間には、なぜ相関がみられなかったのかについては、今後、更なる検討が必要である。

文化的自己観、承認欲求と面子維持意識の関係

相互協調的自己観と面子維持意識の関係性については、相互協調的自己観が強い人ほど他者面子維持の意識が強いという関係は、これまでの他の研究と一致しているが、多くの研究で報告されている「相互独立的自己」と「自己面子維持」の間の相関は中国人社会人においてのみみられた。

また、日中大学生における相互協調的自己観と自己面子維持の間に有意な正の相関があることはこれまでの研究で報告されていない。この結果については、本研究で使用した「相互独立的・相互協調的自己観」尺度(高田, 2000)の項目を吟味し、考察する。

研究2で使用した「相互独立的・相互協調的自己観」尺度は高田(2000)により作成された。この尺度は、日本以外の幾つかの文化(カナダ、日本、ベトナム、中国)と日本文化における各発達段階の調査対象者計3万人に対して実施され、一定の信頼性と妥当性をもつことが確認されている(高田, 2012)。また、同尺度は「相互独立的自己」と「相互協調的自己」の2因子が得られることは各文化間で一貫しているが、両因子がさらに下位領域に分化されるという点においては文化差が確認されている。

日本人は「相互独立的自己」が「独断性」「個の認識・主張」、「相互協調的自己」が「評価懸念(他者を意識し評価を気にする)」「他者への親和・順応」の下位領域に分化するのに対し(高田他, 1996)、中国人は「相互独立的自己」でそのような下位領域が認められなかった(高田, 1998b)。本研究では「相互独立的自己」と「相互協調的自己」の2因子が確認された。両因子について、さらに下位領域に分化できるかどうかを確認したところ、高田他(1996)と同じような因子構造は得られなかった。

ところで、「相互協調的自己」に「評価懸念」に関する項目が含まれることは、相互協調的自己観と自己面子維持の意識の間にみられた正の相関の説明となり得るのではないかと

考えられる。下位領域の「評価懸念」には、「人が自分をどう思っているかを気にする」「何か行動をするとき、結果を予測して不安になり、なかなか実行に移せないことがある」「相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる」といった項目が含まれる。これらの項目は、「自己面子維持」因子に含まれる「自信のない話題について、できるだけ発言しないようにする」「ミスを最小限にするために、発言や行動を慎重に計画する」といった項目と内容が類似していると考えられる。また、自分の面子を維持することは、他者から自分に対する評価(面子に関わる内容)を維持することと言い換えることができる。

また、研究 3 では、承認欲求を加えた検討を行ったところ、自己面子維持意識と拒否回避欲求との間には正の相関がみられたことは、上述の解釈を裏付けていると考えられる。一方、研究 3 では、社会人については、相互協調的自己観と自己面子維持の間に有意な正の相関がみられなかった。この点については、研究 3 では使用した Singelis(1994)の文化的自己観の尺度には、他者との関係性を重視する項目のみで、「評価懸念」に関する項目が含まれていない。

承認欲求と面子維持意識の関係については、日中とも、拒否回避欲求が高いほど、自己面子維持意識と他者面子維持意識が強いことが示唆された。日本と中国の社会においては、自分の面子または他者の面子を維持することは、社会的規範であり、もしそうしないと、周りから否定的に評価される恐れがあるのかもしれない。このように、自分の面子と他者の面子を維持しようとするのは、周りからの否定的評価を避けたいことに動機づけられると推測される。

一方、日本では、賞賛獲得欲求が高いほど、自己面子維持意識が弱いことが示唆された。この点については、日本社会では、自分の面子を維持することは、周りからの否定的な評価を避けることに繋がるが、周りから肯定的評価を得られるとは限らないかもしれない。

面子維持意識の日中比較

中国人は日本人より強い自己・他者面子維持意識をもっていることが示唆された。この結果は、中国人は全般的に強い面子意識をもっているという Gao(1998)の説を支持している。

毛・大坊(2008)は、日中大学生を対象に質問紙調査を実施して社会的スキルの日中比較を行い、「社交性」因子の内容は日中間で大きな違いはないが、他の因子の比較(中国の「相手の面子」因子と日本の「思いやり」因子、中国の「友人への奉仕」因子と日本の「付き合い」因子)では重なる項目が存在していること、重なる項目の得点を比較したところ、いずれも中国人大学生が日本人大学生より高かったことを報告している。

日本、中国(北京・上海・香港・台湾)、韓国、シンガポールといった複数の地域の成人計約 6800 人を対象に行った価値観に関する調査(東アジア価値観国際比較調査, 2002~2004)²によれば、「面子を立てること」という項目については、重要であると思っている人の割合(「非常に重要である」と「どちらかといえば重要である」の割合)は、日本は 40.4%であり、中国のそれぞれの地域は北京 61.2%、上海 77.3%、香港 74.1%、台湾 86.4%であり、韓国は 71.2%、シンガポールは 80.9%であった。日本人の面子意識は他の国より低いことが示唆された。

また、Gao & Ting-Toomey(1998)は、日本人は強い他者意識と相互面子意識をもってい

るが、必ずしも高い自己面子意識をもっているとは限らないと指摘している。本研究で得られた結果から、文化内においては、日本人大学生では自己面子維持意識と他者面子意識が同じ程度で高いこと、中国人大学生では自己面子維持の意識と比べ他者面子維持の意識の方がやや高いことが示唆された。一方、日本人社会人では自己面子維持の意識と比べ他者面子維持の意識の方がやや高いこと、中国人社会人では自己面子維持意識と他者面子意識が同じ程度で強いことが示唆された。

一方、思いやりは日本文化の特徴の1つとして、多くの文化比較研究によって指摘されている(Lebra, 1976; 浜口, 1988)。また、日本文化において他者志向性はしばしば思いやりという概念によって成り立っていると指摘されている(Kitayama & Markus, 1999)。さらに、日本の子供は日常生活の中で早い時期から他者の気持ちを配慮し、行動するように訓練されていると指摘されている(唐澤・平林, 2013)。思いやりや他者配慮を重視する日本人は他者の面子を維持する意識も高いと推測される。

ところで、本研究で得られた大学生と社会人の結果から中国人の他者面子維持の意識が日本人より高いと結論づけるには慎重になるべきと考えられる。その理由は日本人に自己卑下傾向や抑制的な自己評価の傾向があるからである。自己評価における日本人の自己卑下傾向は多くの研究で確認されている(Heine, et al., 1999; Heine, Takata, & Lehman, 2000; 北山, 1998)。また、相川(2007)は、社会的スキルの自己評価の質問紙の回答において、日本人は自分が「よくできる」と回答するのを抑制する可能性があることを指摘している。

また、文化によって調査の回答パターンに違いがあることが指摘されている。日本人は相対的に見て、調査に回答する際に控えめに選択することが知られており、また、中庸な選択肢(どちらでもない)を選びやすいとも指摘されている。Shishido et al. (2009) は、日本、韓国、中国、台湾を対象とする東アジア社会調査 (East Asian Social Survey: EASS) のこれまでの比較調査のデータを基に分析したところ、日本人の応答パターンは中国人と韓国人とは異なっており、日本人は、極端回答を回避し、中間回答を好む傾向があるのに対して、中国人は、極端回答を選ぶ抵抗感がないことを指摘している。このように、得られた文化差を解釈する際には、回答パターンの違いを考慮した上で、慎重に行う必要があると考えられる。

結語

本稿では、3つの質問紙調査により、日本人と中国人の面子維持意識を比較検討した。これまでの面子維持意識に関する文化比較研究は、東アジア文化と欧米文化を比較することに重点を置いており、同じ文化圏内の差異が見過ごされている一方、日本と中国について、一貫した結果が得られていない。Ting-Toomey らの一連の研究や Kim et al.(2007)の研究では、調査対象者を大学生と社会人のいずれか一方に限定しており、面子維持に関する具体的な行為を含まない尺度が使用された。本研究では、既存の尺度の項目を吟味した上で、面子維持に関わる意識の項目と具体的な行為の項目のバランスを考慮し、日本文化的要素と中国文化的要素を反映した項目を用いて、大学生と社会人の両方を対象にして、日本人

と中国人の面子維持意識を比較検討した。本研究で得られた面子維持の尺度は、因子構造や、文化的自己観と承認欲求との関連に関する結果により、概ね信頼性と妥当性を有しており、日本人と中国人の面子維持意識を測定するにはある程度有効であることが示唆された。今後、日本人と中国人の行動などを比較する研究において、関連概念として活用されたいが、本研究で作成した尺度は 32 項目があり、他の尺度と組み合わせた場合は、回答者には大きな負担を与えることが考えられる。この 32 項目の尺度をもとに、更なる関連概念を用いて再検討を行い、尺度を改良していく必要があると考えられる。

一方、本研究の限界としては、サンプル数が小さいこと、サンプルに偏りがあることがあげられる。中国人の場合では、中国は地理的に広く、経済力や社会的進展の地域差が大きいため、中国人の面子維持意識は地域によって異なると考えられる。

また、本研究では、面子維持意識を検討する際には、対人関係という要因を検討していない。面子維持尺度の多くの項目には、「相手」という言葉は出ているが、質問紙の教示文は、「以下の項目のそれぞれについて、普段のあなたにどのぐらいあてはまりますか」となっており、「相手」について具体的に教示していない。これまでの研究では、相手との関係により面子の性質が異なることが指摘されており(Hwang, 1987)、日本社会と中国社会においては、面子が働く範囲が異なると報告されている(林, 2018)。日本人と中国人が、面子維持尺度に回答する際は、「相手」を、具体的に「友人」か「家族」か、または「赤の他人」のどちらかをイメージするかによっては、その回答が違ってくるかもしれない。今後、より幅広いサンプルを対象に、相手との親密度などの対人関係の要因を含めて、更なる検討を行う必要がある。

(神戸大学大学院国際文化学研究推進センター協力研究員)

注

¹⁾ 本研究は筆者の博士論文の一部である。本研究の一部は日本感情心理学会第 25 回大会と日本社会心理学会第 59 回大会にて発表された。

²⁾ 統計数理研究所 東アジア価値観国際比較調査

(文部科学省 科学研究費補助金・基盤研究 A(2) No.14252013(代表 吉野諒三 平成 14 年度から 17 年度)) <http://www.ism.ac.jp/~yoshino/ea/>

引用文献

- 相川充 (2007). 社会的スキルの国際比較は可能か 菊池 章夫(編著) 社会的スキルを測る－KiSS-18ハンドブック 川島書店
- 穴田義孝 (1985). 人間関係にみる日本人の国民性 政経論叢, 53(4), 1065-1104.
- 陈之昭 (1988). 面子心理的理论分析与实践研究, 瞿学伟(編著) 2006 《中国社会心理学评论 (第二辑)》, 107-160.
- Gao, G. (1998). An initial analysis of the effects of face and concern for 'other' in Chinese interpersonal communication, *International Journal of Intercultural Relations*, 22(4), 467-82.
- Gao, G., & Ting-Toomey, S. (1998). *Communicating effectively with the Chinese*. Sage

Publications.

- 浜口恵俊 (1988). 「日本らしさ」の再発見 講談社
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard?. *Psychological review*, 106(4), 766-794.
- Heine, S. J., Takata, T., & Lehman, D. R. (2000). Beyond self-presentation: Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26(1), 71-78.
- Heine, S. J. (2003). An exploration of cultural variation in self-enhancing and self-improving motivations. In *Nebraska symposium on motivation*. 49, 101-128.
- Heine, S. J. (2004). Positive self-views: Understanding universals and variability across cultures. *Journal of Cultural and Evolutionary Psychology*, 2(1-2), 109-122.
- Heine, S. J. (2005). Constructing good selves in Japan and North America. In *Culture and social behavior: The tenth Ontario symposium*, ed. RM Sorrentino, D. Cohen, JM Olson & MP Zanna (pp. 95-116). Psychology Press.
- Heine, S. J. (2007). Culture and motivation. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.), *Handbook of cultural psychology* (pp. 714-733). New York: Guilford.
- Ho, D. Y. F. (1974). Face, social expectations, and conflict avoidance. In *Readings in Cross-cultural Psychology, Proceedings of the Inaugural Meeting of the International Association for Cross-Cultural Psychology Held in Hong Kong, August 1972* (pp.240-251). Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Hwang, K. K. (1987). Face and favor: The Chinese power game. *American journal of Sociology*, 944-974.
- 唐澤真弓・平林秀美 (2013). 思いやりの文化的基盤: 就学前教育にみる他者理解の比較文化的研究 東京女子大学比較文化研究所紀要, 74, 65-92.
- 川喜田二郎・牧島信一(1970). 問題解決学-KJ ワークブック法 講談社
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介(2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11(2), 86-98.
- Kim, T. Y., Wang, C., Kondo, M., & Kim, T. H. (2007). Conflict management styles: the differences among the Chinese, Japanese, and Koreans. *International journal of conflict management*, 18(1), 23-41.
- 北山忍 (1998). 自己と感情: 文化心理学による問いかけ 東京: 共立出版株式会社
- Kitayama, S., & Markus, H. (1999). The yin and yang of the Japanese self. *The coherence of personality*, 242-302.
- Lebra, T. S. (1976). *Japanese patterns of behaviour*. University of Hawaii Press.
- Lim, Tae Seop, (1994). Facework and interpersonal relationships. In: Ting-Toomey, Stella (Ed.), *The challenge of facework: Cross-cultural and interpersonal issues* (pp. 209-229). SUNY Press.
- 林萍萍 (2017). 面子の概念についての日中比較一日中大学生の調査をもとに. 次世代人文社会, (13), 201-216.

- 林萍萍 (2018). 面子喪失に関する日中比較—日中大学生の質問紙調査を基に— 国際文化学, 31, 152-167.
- Lin, Y. (1936). *My country and my people*. The John Day Company.
- 刘继富 (2011). 再论面子的界定 社会心理科学, 26(2), 9-14.
- Mak, W. W., Chen, S. X., Lam, A. G., & Yiu, V. F. (2009). Understanding distress: the role of face concern among Chinese Americans, European Americans, Hong Kong Chinese, and mainland Chinese. *The Counseling Psychologist*, 37(2), 219-248.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, 98(2), 224-253.
- 毛新華・大坊郁夫 (2006b). 大学生社会技能量表(ChUSSI)の初歩編制 中国心理衛生雑誌, 20(10), 679-683.
- 毛新華・大坊郁夫 (2008). 社会的スキルの内容に関する中国人大学生と日本人大学生の比較 対人社会心理学研究, 8, 123-128.
- Morisaki, S., & Gudykunst, W. B. 1994. Face in Japan and the United States. In S. Ting-Toomey, S. (Ed.), *The challenge of facework: Cross-cultural and interpersonal issues* (pp. 47-93). SUNY Press.
- Oetzel, J., Ting-Toomey, S., Masumoto, T., Yokochi, Y., Pan, X., Takai, J., & Wilcox, R. (2001). Face and facework in conflict: A cross-cultural comparison of China, Germany, Japan, and the United States. *Communication Monographs*, 68(3), 235-258.
- Oetzel, J. G., & Ting-Toomey, S. (2003). Face concerns in interpersonal conflict a cross-cultural empirical test of the face negotiation theory. *Communication research*, 30(6), 599-624.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Shishido, K., Iwai, N., & Yasuda, T. (2009). Designing Response Categories of Agreement Scales for Cross-national Surveys in East Asia: The Approach of the Japanese General Social Surveys. *International Journal of Japanese Sociology*, 18, 97-111.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Singelis, T. M. (1994). The Measurement of Independent and Interdependent Self-Construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20(5), 580-591.
- 末田清子 (1998). 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究 社会心理学研究, 13(2), 103-111.
- 菅原健介(2004). ひとはなぜ他人の目が気になるのか? 菅原健介(編) ひとの目に映る自己 「印象管理」の心理学入門 金子書房 1-23.
- 高田利武 (1996). 中国における文化的自己観—日中の比較— 総合研究所所報, 5, 3-13.

- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立的-相互協調的自己観尺度 (改訂版)の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- 高田利武 (1998b). アジアにおける文化的自己観-日本・中国・ベトナムの比較- 奈良大学総合研究所所報, 6, 25-27.
- 高田利武 (2000). 相互独立的-相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, 8, 145-163.
- 高田利武 (2012). 日本文化での人格形成: 相互独立性・相互協調性の発達の検討 ナカニシヤ出版
- Ting-Toomey, S. (1988). A face negotiation theory. In Kim, Y. Y., & Gudykunst, W. B. (Ed.) *Theory and intercultural communication* (47-92). Sage Publications.
- Ting-Toomey, S., & Oetzel, J. G. (2001). *Managing intercultural conflict effectively* (Vol. 6). Sage.
- Ting-Toomey, S., Gao, G., Trubisky, P., Yang, Z., Soo Kim, H., Lin, S. L., & Nishida, T. (1991). Culture, face maintenance, and styles of handling interpersonal conflict: A study in five cultures. *International Journal of conflict management*, 2(4), 275-296.
- 富田裕香 (2014). 日本人学生と中国人留学生における友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連 人文科学研究(10), 83-95.
- 許英美・田中雄三 (2004). 日中大学生の自我同一性地位に関する比較研究: 文化的自己観からのアプローチ 鳴門生徒指導研究, 14, 17-31.
- Zane, N., & Yeh, M. (2002). Assessment: Studies on loss of face. *Asian American mental health: Assessment theories and methods*, 123-13.
- Zhang, Q., Ting - Toomey, S., & Oetzel, J. G. (2014). Linking Emotion to the Conflict Face - Negotiation Theory: A US-China Investigation of the Mediating Effects of Anger, Compassion, and Guilt in Interpersonal Conflict. *Human Communication Research*, 40(3), 373-395.
- 赵卓嘉 (2013). 由“面子”衍生的若干近似概念的辨析 社会心理科学, (1), 84-93.
- 朱瑞玲 (1988). 中国人的社会互动: 论面子的问题, 瞿学伟(編著) 2006 《中国社会心理学评论(第二辑)》, 79-106.

付録1 日中全体の面子維持尺度の因子構造(研究1で使用された53項目)

項目	Factor1	Factor2
第1因子: 他者面子維持; $\alpha = .93$		
48.相手のプライドを維持することに協力する。	.78	-.07
31.相手の意見を尊重する。	.76	-.17
50.相手の尊厳を維持することに協力するように心がける。	.73	-.05
36.物腰が柔らかいとよく言われる。	.73	-.07
45.いつも相手の立場に立って物事を考える。	.72	-.14
28.相手のことを尊重するように気をつけている。	.72	-.17
35.いつも笑顔で人とつき合う。	.67	-.16
30.相手の面子を潰さない	.66	.09
34.いつも相手の面子を立てるよう心がける。	.64	.01
46.相手の威厳を保つように心がける。	.62	.06
43.人づき合いの中で、とても我慢強い方である。	.62	-.08
40.いろいろ考えて、最も妥当な方法で目上の人や友達と付き合う。	.58	.04
9.公的場面で何かをする前に、あらゆる結果を覚悟する。	.57	-.14
51.相手の面子を保つことを一番の関心事にする。	.56	.08
42.バツが悪いとき、いつも相手に引っ込みがつくようにする。	.55	-.03
53.相手の自己イメージを維持すること協力するよう心がける。	.55	.14
29.いつもへりくだった態度でいるように心がけている。	.52	.13
44.話をしている相手の長所によく触れる。	.45	-.11
49.謙虚に振舞うことで相手の気分をよくするように心がける。	.45	.32
21.相手が当惑するだろうから、相手を責めない。	.43	.17
52.相手の信用を維持することに協力するよう心がける。	.43	.19
47.謙遜でいることで相手との関係性を保つ。	.42	.29
33.できるだけ相手が嫌がる話題や相手と意見対立しそうな話題を避ける。	.41	.22
25.ある問題をディスカッションするとき、相手の人を自分が非難していないことを知らせるように努める。	.41	.22
32.つき合う相手の短所に触れることを極力避ける。	.40	.14
37.目上の人に常に敬意を表す言葉遣いをする。	.40	.22
22.何かをする前に、他の人の行為を慎重に観察する。	.40	.24
38.相手に遠慮する。	.39	.26
3.他の人のいるところでコメントする前に、自分の意見が適切かどうか確認する。	.34	.24
39.人のプライベートなことにあまり触れない。	.24	.09
24.他の人と自分の争いを解決するために、第三者に助けてもらうことを好む。	.19	.12
第2因子: 自己面子維持; $\alpha = .90$		
10.誰かが自分を批評しているとき、その人を避けようとする。	-.37	.76
1.ディスカッション中、他の人に無知と思われるだろうから、質問しないようにする。	-.15	.71
2.他の人の前でミスをしたくないので、控えめな態度を維持する。	-.04	.67
17.他の人の前で自分の弱みを見せないように心がける。	-.19	.67
11.自分が他の人の前でミスをした時、他の人がそれに気づかないようにする。	-.05	.63
8.社会的規範と一致するように、他の人と同じ行為をする。	.01	.63
12.自分が恥をかかないように心がける。	-.06	.59
7.目立たないように行動する。	-.01	.59
4.他の人が自分に非現実的なほど高い期待をもたせないように、自分の能力と業績を控えめに言う。	-.02	.53
13.自分のイメージを維持するように心がける。	.20	.52
18.自分のプライドを守るように心がける。	-.01	.51
14.他の人の前で気まずくならないように心がける。	.18	.42
15.他の人の前で、自分の尊厳を守るように心がける。	.10	.41
5.ミスを最小限にするため、発言や行動を慎重に計画する。	.25	.38
16.自分の威厳を保つように心がける。	.03	.38
20.自分の頼み事が相手にとって迷惑だと思うから、助けを求めることをためらう。	.27	.36
19.あることにコメントする前に、自分が間違っているかもしれないと言う。	.28	.34
6.他の人と会う時、自分に対する期待を気にする。	.23	.33
26.たとえ他の人が誤りであることが分かったときでも、その人を批判しないように気をつける。	.27	.31
41.いつも人と協調するように心がける。	.26	.30
23.不公平に扱われたときでさえ、公に文句を言わない。	.22	.29
27.誰かが自分を当惑させたとき、それを忘れようと努める。	.15	.17
因子寄与率	14.16	12.18
累積寄与率	26.71%	49.69%

※灰色着色行は先行研究と異なる因子配置の項目を表す。